

空性

平川 彰



『般若心経』には「観自在菩薩が深般若波羅蜜多を行ずるとき、五蘊は皆空であると照見された」と説いています。ここで「五蘊」というのは、五つのあつまりという意味で、これでもって私どもの心身や世界の一切を示すのです。それ故、五蘊皆空は自己をふくむ世界のすべてが空であるという意味で、観自在菩薩は深い般若波羅蜜多の実践によって、それを照見せられた、即ち洞察せられたという意味であります。

般若波羅蜜多を行ずるとは、変化する現象世界を変化するままに見ることです。そのためには、執著を捨てる必要があります。この「ありのままに見る智慧」が般若です。しかし私共には、自我にたいする執著がありまして、自己を自己同一と見るつよい習慣性があります。この執著に妨げられて、自己のありのままのすがたを見ぬくことができません。例えば私共は、大学に入学して勉強して、いまの自分よりもすぐれた自己になりたいと思う。しかし現実の

自己より進歩すれば、自己は変化し、自己でないものになるわけです。しかし自己の変化することを望みながら、しかし入学した時の自己と卒業するときの自己とが同じでありたいと思います。しかしこれは明らかに矛盾です。

この際、「同じ自己」でありたい」と思うのは、自我にたいする執著でして、これは「識」の判断です。識は対象を割り切って判断しますから、対象を静止的につかみます。

そのために自己の心中に「自我」という固定的なものを作りあげるのです。しかし実際は自己は絶えず変っているのとして、固定的自我は存在しないのです。ただ自己の変わり方が緩慢かんまんですので、識はその変化を無視するのです。この識の判断の背後にあつて、心の変化するままに、自らも変化しながら理解する作用が般若の智慧です。般若は自ら変化しつつあるのですから、対象に執著することはありません。この無執著の智慧を「空の智慧」といいます。「空」とは「何もない」という意味ではなく、何ものにも執著しないという意味です。すなわち対象をありのままに知る智慧です。

般若は自ら変化しつつ理解する作用ですから、変化する対象を変化するままに理解することができます。この「変

化するままの対象」が「空を本性とする存在」であります。この場合の空は、固定的実体がないという意味です。諸行は無常であり、あらゆるものが絶えず変化しているのですから、一切は空であるわけでして、この空を知る智慧が「空智」です。すなわち般若であるわけです。そして何人にも、この般若の智慧が生れながらにそなわっています。しかし般若は無執著の智慧でありますので、自己の心中に般若がはたらいていることを知ることはむづかしいのです。しかし私共は、心中の般若の作用を見きわめて、そのはたらきを強めていくことが大切です。ともかく一切諸法の空ということと、空智とは表裏の関係にあるのでして、空智に目ざめない限り、諸法の空を知ることはできません。

大智度論には、一切諸法を知る智慧を「一切智」といいますが、これは一切諸法の本性が空であることを知る智慧です。ので、一切智は空智であります。空を知れば一切諸法を知ったと言つてよいのです。しかしこのように一切諸法の共通相は「空」ですが、しかし現実には一切諸法はそれぞれ別々のものとして現れています。柳は緑りに花は紅くわいと言います。太郎は太郎として、次郎は次郎として、そ

それぞれ異なっています、両者が混同することはありません。このように世間の存在は千差万別でして、全く同じものはないわけです。このように世間の存在は区別されていて、整然と存在しているようですが、しかし諸行は無常でして、すべての存在が絶えず変化しています。例えば私共自身も絶えず変化しているのです、まだ若いと思っっているうちに、老いはわが身に迫っています。五十にもならないのに、若い娘さんに電車で席を譲られたら、誰でも強いショックを受けるでしょう。このように自己の老いは受け入れ難いものです。これは、自己を同一と見る識の判断にまどわされているからでして、同時に自我にたいする執著に基づくわけです。

もちろん古稀を過ぎて、老いが一段と進み、足腰も弱まれば否応なしに自己の老いを認めざるを得ないのですが、そこには深刻な苦しみがあります。この苦しみは自己にたいする執著からおこるのです。とくに死に直面した時には、現に生きている自分がどうして死なねばならないのか、そのことはなかなか理解し難いことでして、そこに深刻な苦しみがあります。この苦しみを超えるには、自己は絶えず変化していることをありのままに知る般若の智慧によって、

現実をあるがままに知って、執著を離れる以外に方法はないと思います。

このように一切諸法はそれぞれ区別して存在していますが、しかし自己同一ではなく、絶えず変化しています。この存在を「仮有」といいます。私共は自己存在として他から区別して存在していますが、同時に周囲とつながっており、それによって絶えず変化しています。すなわち、自己は仮有として存在する無常なる存在です。この諸法の仮有を正しく知るのも、般若のはたらきでして、これを仮智といいますが、さきの一切智に対して「道種智」といいます。種々の種類の差別を正しく知る智慧のことです。したがって一切智と道種智とは表裏の関係にあります。空智の裏付けがあるから、個々の存在の無常を正しく知って、それが仮有であることを納得することができます。故に一切智と道種智とが対応しているように、空智と仮智とも対応しています。

即ちこの世界は「仮」の世界であります。自己も仮有であります。世界は一切が仮有であるわけです。若者がいつまでも若者であるのではないように、自分は善人だと思っ

ていても、他人の誘惑にのって悪事を行えば悪人になるわ

臨時増刊
在家佛教

特集
生と死
現代人の人生観
苦と楽

各冊 ¥1,030 円71

朝比奈	宗源	井伊	文字
梅原	猛	雲藤	義道
江部	鴨村	大西	良慶
大山	澄太	荻原	井泉水
長田	恒雄	勝又	俊教
加藤	辨三郎	金子	大榮
亀井	勝一郎	久保田	正文
椎尾	辨匡	柴山	全慶
清水	公照	杉	靖三郎
鈴木	大拙	曾我	量深
竹田	益州	竹中	信常
竹山	道雄	玉城	康四郎
中根	專正	中村	元明
那須	政隆	奈良	康治
西川	玄苔	西谷	啓昇
西元	宗助	東	昇興
平川	彰	平沢	達朗
藤井	実応	藤島	朗彰
古田	紹欽	本多	宗惠
増谷	文雄	松林	無文
松本	大円	山田	令聞
山田	靈林	結城	
吉野	秀雄		

在家佛教協会

東京都千代田区大手町1-6-1
郵便番号100
電話03-3214-5024 振替東京0-17765

けです。すなわち人間は、善を行うことにより善人となり、悪を行うことにより悪人となるのです。同様に教えることによつて教師となり、学ぶことによつて学生となるのです。大学にいる時は学生でも、家庭教師になつて教えるときは、生徒からは「先生」と呼ばれるわけです。そこには、先生という固定的なもの、学生という固定的なものがあるのではないのです。

同様にホテルで研究会をしている時には、机として使われているものが、ひるになつてボーイさんがそれに白い布をかけて、食器を並べれば、それは食卓になるわけです。そして庭で焚き火をしている時、古くなつた机を持つてきて、その中に投げこめば、それは薪になつてゐるわけです。

すなわちものには固定的な「自性」(変らない性質)があるのではなく、「はたらき」(機能)によつて、在り方が變つていくのです。すなわちものは「縁起」によつて成り立っているのです。諸行無常で縁の状態が変わりますから、存在それ自身も變つていくのです。故にわれわれは知らないうちに老人になるのであり、気がついてみたら死に直面しているというわけです。このような存在の在り方を「仮有」といふのでして、般若の仮智によつて知られるのです。われわれが、苦を超えるためには、自己が仮有であることを正しく知ることが大切です。

空と仮の關係を、般若心経では「色即是空、空即是色」

と表現しています。色とはいろいろや形のことですが、物や肉体などをも含めます。それらの一切が空であるのが「色即是空」です。これは空智で知るのです。同時に、一切が空であるから、色が色として成りたつことができます。若し人間に善の自性があったら、悪人にはなれないわけです。しかしそうではなく、人間の本性は空であるから、善人も悪をなせば悪人となるのであり、その悪事が真実となるわけです。この点を一切が空であるから色が成立するとして、空即是色というのです。

そして存在の空を知る「一切智」と、諸法が仮有であることを知る道種智とを総合して、両者が別のものではないことを知る智慧を「一切種智」といいます。これは、空智と仮智とを総合した「中道智」とも言います。そしてこの三種の智慧は、すべて般若の智慧であります。

この空智と仮智と、中道智の関係を『金剛般若経』には、「心は心ではない、それだから心である」という仕方で説いています。「国土を莊嚴するというのが、国土の莊嚴とは莊嚴ではない。それだから国土の莊嚴である」とも説かれています。これをさきの机の在り方に当てはめれば、「机は机ではない。それだから机である」と表現できると思い

ます。机だ机だと思っていたものが、気がついてみたら食卓になっていたのですし、また薪にもなっているわけです。机はたしかに机としての作用を現わしますが、机という固定的なものがあるわけではないのです。世間には小さまざまの机がありますが、「机とはこれである」という「机そのもの」は見つかりません。しかしそれだからどんな机でも机であることができるのです。この関係によって、「机は机ではない、それだから机である」という言葉の意味が理解できると思います。

心は心ではない、それだから心であるという立言も、この内容は「心でないもの」ばかりですから、このように立言できます。そして心は刹那滅で絶えず変化していますから、過去の心も現在の心も、未来の心も不可得であると言っています。心はつかもうと思ってもその刹那に過去に入ってしまったつかめないのです。これは心だけでなく、一切諸法がそうですから、この点から一切諸法の空を知ることができると思います。

なお空と仮とを総合したものが中道であるといいましたが、この点に関しては別の機会に申し上げたいと思います。